

荒木友雄教授 横田耕一教授 定年退職記念号に寄せて

法学部長 村田 彰

本号は、荒木友雄教授および横田耕一教授のご退職を記念するものです。

荒木友雄先生は、一九六五年に裁判官に任ぜられ、一九九八年に東京高等裁判所の部総括判事になられて二〇〇一年に定年退官されるまでの四六年間にわたり、公職に就かれ司法に携わってこられました。退官後の二〇〇一年四月から本学に法学部教授として就任し、二〇一〇年三月に本学を退職されるまで、刑法および刑事訴訟法を担当されました。その間、中央大学でも客員教授として法曹論を担当されました。そして、二〇〇六年四月には、瑞宝重光章を受賞されています。

一度、荒木先生と早朝の東京駅で偶然にお会いしたことがあります。わたくしは長野で温泉権を調査するために東京駅に寄ったのですが、荒木先生は、奥様とご一緒に仙台へ向かわれる途中とのことでした。荒木先生は奥様にとても優しく接しておられました。荒木先生は心から優しい人だと思いました。こうしたことは教授会の席上でもよくあり、荒木先生は、教授会の若いメンバーにとっても優しく紳士的に接しておられました。

ところが、議論ということになりますと、普段の荒木先生とは異なる一面が現われることがあります。荒木先生は横田先生としばしば議論をなされるのですが、ときには白熱した議論になることがあり、そのような時には法学部のメンバーはその傍らで議論の行く末を見守っているだけでした。わたくしもお二人の白熱した議論をよく聴いたことがあります。最後まで、お二人とも、自説を譲ることは決しないのですが、とても楽しそうでした。法学部のメンバーは全員、紳士的ながらも白熱した議論を展開する荒木先生のお姿を忘れることはないでしょう。

荒木先生は、法学部内の研究会で「ガバナンスを考える」と題する報告をされたことがあります。このことが契機となり、村田彰・大塚祚保編『現代とガバナンス』（酒井書店、二〇〇八年）を結実することができました。アカデミックで学際的な法学部となるようにご尽力して下さったことにつきまして心からお礼を申し上げなければなりません。

また、荒木先生は、野球少年だったこともあり、とても野球が好きで、同じく野球の好きな徳永哲男先生と野球の話をよくなされていました。その中で、荒木先生は、徳永先生の投げたボールを打ってみせる、と自信たっぷりに述べておられました。残念ながら、この「対決」は未だ実現していませんが、いつか実現する日を心から楽しみにしています。

横田耕一先生は、一九六八年三月に東京大学大学院法学政治学研究科博士課程で学んだ後、同年四月に九州大学教養部で法律学を講じてから二〇〇二年三月に定年退職されるまでの三四年間にわたり、九州大学で教鞭を執られました。本学には二〇〇一年四月に法学部教授として就任され、二〇一〇年三月に本学を退職されるまで、憲法の講義を担当されました。

横田先生は、稀にみる博学で、天皇制や人権論をはじめ、アメリカ・中国事情などもよく教わりました。横

田先生とわたくしとの研究室とが同じフロアーということもあり、横田先生と親しくさせていただくようになり、横田先生のご自宅のある福岡でお会いしたことが二度ほどあります。横田先生は、お忙しい中、人権問題、日本の社会問題などについて長い間お話を下さり、その中で、「学問とは社会を変革するためにある」という趣旨を述べられたことがあります。この言葉にはわたくしなりに考えさせられるところがあり、わたくしの学問観に大きな影響を与えています。その他にも、横田先生は、カール・マルクスの話をなされているときに、「地獄への道は善意で敷き詰められている」という言葉を引用され、この言葉に対して好意的に評価されたことがあります。社会運動等にも長い間にわたって携わってこられた横田先生から発せられた重い言葉であるだけに、今でもわたくしの心に強く残っています。

わたくしは、一度、横田先生の憲法の講義を拝聴したことがあります。横田先生は、手にマイクだけを持ち、学生に向かって一度も淀むことなく迫力ある講義を堂々となされていました。大学でおこなう最後の年の講義とはいえ、わたくしにあのような講義ができる自信はとてもなく、ただただ頭が下がる思いでした。

横田先生は、本学法学部の雰囲気をいつも褒めて下さいました。横田先生や荒木先生が教授会のメンバーにおられたからこそ、和やかな環境が続いたのだと思っただけですが、このような環境を作って下さった両先生のご尽力に報いるためにも、この雰囲気はいつまでも法学部に残さなければならぬと思っています。

法学部教授会は、このように傑出された両先生がなされた様々なことに報いるにはあまりにもささやかでございしますが、心からの感謝の意をこめまして、本号を両先生に捧げるものです。

最後に、両先生のご健康とご多幸を心からお祈り申し上げます。

二〇一〇年十一月